

Title	Bangladeshにおける清掃人カーストと差別： チッタゴンとコックス・バザールでのフィールド・ノート
Author	野口, 道彦
Citation	同和問題研究：大阪市立大学同和問題研究室紀要. 21 卷, p.17-51.
Issue Date	1999-03
ISSN	0386-0973
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学同和問題研究会

フィールドノート

バングラデシュにおける清掃人カーストと差別 — チッタゴンとコックス・バザールでのフィールド・ノート —

野口道彦

§ 1. 問題意識

§ 2. はじめてのバングラデシュ

§ 3. 清掃人カーストの研究状況

§ 4. Bandel Sweeper Colony

§ 5. Cox's Bazar Sweeper Colony

§ 7. Bandel Sweeper Colony の夜間学校の青年教師

§ 8. 考察と今後の課題

§ 1. 問題意識

1998年12月7日から12月20日にかけてバングラデシュの第二の都市、チッタゴンでポスティー (bostee)といわれるスラムやスコッターを見てまわった^{注1}。このフィールド・ノートはそのうち、清掃カーストを中心にまとめたものである。

今回の調査は、三輪嘉男教授を代表者とする共同研究「近代化・国際化による政治構造・産業の変化、地域社会の変容—バングラデシュと日本の地域比較—」の第1回目の現地調査である^{注2}。メンバーは代表者のほか、谷口弘行（法学部）、佐藤彰男（追手門女子大学）、Iftekhhar U. Chowdhury（チッタゴン大学）と私の5人である。それぞれは、居住・住環境の実態と環境改善への自立活動、ODAによる開発援助および地域社会における政治構造の分析、地域住民組織の構造・機能変容、地域社会の開発と援助における産業社会学的分析などの研究課題をもっている。

私の研究テーマは、バングラデシュにおける被差別集団関係である。今回の渡航にあつたて、私自身がもっていた課題はつぎのようなものであった。

バングラデシュはムスリム社会である。ムスリム教徒が全人口の88.3%を占め、ヒンドゥー教徒が10.5%と少数である（表1）。そのために、インドのようなカースト制度はないと一般的にはいわれている。ましてや、被差別カーストは存在しないとされている。確かに、ムスリムの教義からすれば、カースト差別などありえようはずがない。そのため、被差別カー

注1 ポスティは、ベンガル語でスラムという意味。バングラデシュ統計局の定義では、スラム「政府所有ないし私有空き地に非体系的に成長する居住単位の一群」で、スコッターとはほぼ同じ意味で使われている。高田峰夫「“メス”の生活—チッタゴンのスラムの人々(2)」(『広島修大論集』Vol.34, No.2, 1994年)

注2 この共同研究は1998年4月～2001年3月の3年間の継続研究として、神戸学院大学から研究助成を受けている。

ストとされた人々は、差別からの解放を求めてムスリムに転宗したという説がある。おおいにあり得る話である。けれども、転宗したからといって、簡単に差別から解放されるとは考えにくい。カーストによって社会組織が分断されて、特定の職業に限定され、共同体としてまとまった集落が形成されている場合には、単なる転宗だけでは、差別から解放されない。

アンベドカル博士が指導した仏教への転宗運動も、新仏教徒として新たに位置づけられてしまい、カースト的序列からの解放は達成できなかったという苦い教訓をもっている^{注3}。そのように考えると、「ムスリム社会にはカースト差別はない」という主張をにわかには信じることはできない。今回の調査の第一の目的は、バングラデシュにカースト的差別を受ける人々が存在するかどうかを確認することであった。

また第二の目的は、もしカースト的差別があるとすれば、それはどのような形態をとっているのか、おおよその鳥瞰図を描くことである。バングラデシュは、かつてはインドの東ベンガルであり、カルカッタを中心とする西ベンガルとともに、ベンガル地方として一つにくくられていた。ベンガル語を話し、文化的、社会的にみても一体であった。ムスリムとかヒンドゥーとかいった宗教は、意識の上部構造であり、それを根底で支えている生活感覚、人間関係のありかたや自然との付き合い方、価値観・美意識や感性など、より根底的なところでは共有するものが多い。そうだとすれば、清掃労働や洗濯労働、皮なめしなどの職業に対する見方や、社会の階層序列構造に対する見方も、インドの西ベンガル社会と大きくかけ離れたものではないだろう。

このように考えると、バングラデシュ社会では、支配的な宗教とは相対的に独立して、習俗としてカースト的差別が残存しているのではないかと推測して、ほぼ間違いはないだろう。インドにおける被差別民が差別からなかなか解放されないのは、ヒンドゥーの浄穢観念や貴賤観がしっかりと分業システムと結びついているからだと言われた。ヒンドゥー教が、カースト・システムを正当化するイデオロギーを提供してきたことは確かである。しかし、宗教は外皮にしかすぎない。バングラデシュでは、そのような差別を合理化するヒンドゥー教が支配的でない。けれどもカースト的差別が存続しているとすれば、何によって説明することができるのだろうか。インドにおけるカースト研究は、宗教という外皮に惑わされてきたが、バングラデシュでは、そのような外皮がないだけに、日本の部落問題により近いのかもしれない。

注3 B.R.アンベドカル『カーストの絶滅』(山崎元一、吉村玲子訳、明石書店、1994)の「アンベドカル小伝」

表1. 宗教別人口構成(1991年)

	Bangladesh	Chittagong	ChittagongH.T.	Dhaka
Musulim	93,881,029	5,752,206	320,154	12,167,099
Hindu	11,178,866	808,095	79,701	985,5189
Buddihist	623,410	137,448	337,698	8,686
Christian	346,062	7,216	5,437	59,510
Others	285,625	10,422	886	11,614
総数	106,314,992	6,715,387	743,876	13,232,427
Musulim	88.3%	85.7%	43.0%	91.9%
Hindu	10.5%	12.0%	10.7%	7.4%
Buddihist	0.6%	2.0%	45.4%	0.1%
Christian	0.3%	0.1%	0.7%	0.4%
Others	0.3%	0.2%	0.1%	0.1%
総数	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

1997 Statistical Yearbook of Bangladesh, 18th ed. p.32より作成

第三の目的は、本調査でどのような地域や集団を対象に選ぶのか、その目星をつけることであった。私自身の個人的な問題関心からすれば、バングラデシュの被差別集団をめぐる社会調査を行いたいという思いがあった。被差別集団といっても、カースト的被差別集団だけではなく、チッタゴン丘陵の民族的マイノリティ集団、またインドやパキスタンからの独立戦争の過程で生み出されたエスニック・マイノリティなど様々である。いずれが現実的に調査可能であるのかを検討する必要があった。

圧倒的多数が貧困線以下という社会では^{注4}、絶対的な窮乏状況が差別—被差別関係を無化してしまうのか、あるいはより荒々しい暴力的な形態をとるのか、そういった問題意識とともに、最貧国といわれるバングラデシュ社会で、人口が急激に膨張している都市社会で階層構造がどのようなかたちをとっているのか、階層移動がどのように展開しているのか、こうした基本的な見取り図を頭にいれるというのも、もう一つの調査の目的であった。

注4 高田峰夫の推定によると、チッタゴンの人口約200万人のうち、絶対的貧困線（2,122キロカロリー）以下は約130万人、中核的貧困線（1,805キロカロリー）以下は約60万人もいる。高田峰夫「チッタゴンのスラムの人々—バングラデシュの“マチ”と“ムラ”の相関関係—」（『民族学研究』Vol.57, No.2, 1992年）

§ 2.はじめてのバングラデシュ

Chowdhury教授は、わたしが1987年から88年にかけて在外研究をおこなっていたカルホルニア大学パークレイ校で知り合い、それ以来親しく付き合うようになった間柄である。彼はしばしば日本に来られたが、私の方は、今回が初めてのバングラデシュ行きであった。Chowdhury教授はチッタゴン大学社会学部での研究生生活のかたわら、非営利団体であるImageを主宰し、スラムやスコッターの貧しい住民に対して医療・教育の支援活動を行っている^{注5}。

Imageは人口約160万人のチッタゴン市のうちの8つの区(Ward)とコックス・バザール(Cox's Bazar)を活動の範囲とし、4つのクリニックを設け、さらにそれぞれにサテライト診療所を置いている^{注6}。活動は、家族計画の指導、妊婦や乳幼児の健康維持、無料もしくは低額治療であり、医師、保健婦、健康指導員など専任スタッフを擁している。Imageのスタッフたちは地域の住民から篤い信頼をえている。そのスタッフに同行していただいたこともあって、私たちの訪問先では、極めて友好的な雰囲気の中で聞き取り調査をすることができた。

今回、訪問したスラム・スコッターやNGO組織などを、列挙すると次のようである^{注7}。

- Image本部(NGO)と第1診療所
- Image第2診療所と周辺のスラム居住者からの聞き取り調査
- Image第3診療所での聞き取り調査、
- Cox's BazarのImage第4診療所のヒンドゥー出身の医師、保健婦から聞き取り調査
- Wireless Colonyでの聞き取り調査^{注8}
- Ambagan Colonyでの聞き取り調査
- Bandel Sweeper Colony (被差別カースト)での聞き取り調査
- Cox's BazarのSweeper Colony (被差別カースト)での聞き取り調査
- Bandel Sweeper Colonyの学校の青年教師から聞き取り調査
- 牛と羊の解体作業の観察と屠場労働者(コサイ)からの聞き取り調査
- 漁村(被差別地区)の学校、長老からの聞き取り調査、
- 農村での参与観察
- 船舶解体工場の労働者から聞き取り調査
- 私的波止場で荷役作業の観察と荷役会社経営者からの聞き取り調査

注5 Imageは、1989年設立。USAIDの支援を受け、全国統合人口保健プログラム(NIPHI)を実施している

注6 1991年のChittagong c.c.の人口は159万9千人、Chittagong Divisionの人口は261万3千人である(1997Statistical Yearbook of Bangladesh,18th ed)、なおChittagong Divisionには、人口15万4千人のCox's Bazarを含まれる。

注7 日本からは、私と佐藤彰男氏の二人がバングラデシュに行った。

注8 colonyという表現が多いが、colonyは家族ぐるみで住むボスティであり、男子単身者が住むmesと区別される。

- 縫製工場の労働者からの聞き取り調査
- EPZの日系工場の現地人工場長からの聞き取り調査
- Codex(NGO)での聞き取り調査、
- 漁村の学校(NGO経営)の見学
- Unicefの学校を見学
- 富裕階層の子どもの通う英国スタイルの私立小学校の見学
- チッタゴン大学社会学部との交流
- 眼科医学校付属病院での参与観察
- イスラム銀行の経営者との懇談
- ダッカでのアッパー・ミドル・クラスの結婚式の参与観察

2週間ほどの短い期間で、多くのところを精力的に回り、多くの人々から話を聞くことができた。これもすべてChowdhury教授が相手側との調整をして下さった賜物であり、出発前に日本で予想していたよりも遙かに大きな成果をあげることができた。Chowdhury教授に深く感謝したい。

なかでも、Sweeper Colonyを2箇所訪れることができたのは、最大の成果であった。いずれの地区も、Chowdhury教授自身も訪れたこともなく、直接の面識もないところであるにもかかわらず、八方手をつくして、コンタクトをとっていただいた。心から感謝したい。というのも、Sweeper Colonyは、バングラデシュ国内の人々からアンタタッチャブル視されており、チッタゴン大学の社会学の教授たちと懇談したときにも聞いてみたが、社会階層論を研究している研究者でも、足を踏み入れたことはないということだった。また、バングラデシュにおいてもSweeper Colonyについての研究論文は一本もないという。わずかに、下水道整備に関連して、三宅博之や村上真弓の論文があり、屎尿処理・運搬人に関して言及がある^{注9}。ましてや行政機関の統計的データもなく、その生活実態も知られていない。それに反比例して、あることないことが誇張され、偏見がもたれている。

§ 3.清掃人カーストの研究状況

インドにおける清掃人カーストは被差別カースト研究の重要な領域であり、研究も進んでいる。日本人によるものでは、篠田隆、三宅博之などによる研究がある^{注10}。また、篠田隆に

注9 三宅博之「ダッカにおける下水処理問題」(H.G.バント他『アジアからのメッセージ-アジア、南アジア、そしてインド』) 嵯峨野書院、1999年。村山真弓「ダッカの都市化と下水処理」大野盛雄、小島麗逸編『アジア思考』けい草書房、1994年

注10 篠田隆『インドの清掃人カースト研究』春秋社、1995年。三宅博之「カルカッタとハウラーにおける清掃人の社会経済的状況」『フィールドからの現状報告』(押川文子編、叢書カースト制度と被差別民第5巻)、明石書店、1995年

よると、行政によって、清掃人の労働条件の改善や地位の向上をはかるために次のような調査報告書や勧告書がだされている^{注11}。

- Government of Bombay, Report of the Scavengers' Living Conditions Enquiry Committee, Bombay, 1958. (Barve Committee Report)
- Government of Haryana, Report of the Commission to Enquire into the Living Conditions of Safai Mazdoors Employed by Local Bodies and Private Scavengers Working in Haryana State, 1969-72.
- Government of Karnataka, Report of the Committee on Improvement of Living and Working Conditions of Sweepers and Scavengers, 1976.
- Government of India, Ministry of Home Affairs, Report of the Scavenging Conditions Enquiry Committee, New Delhi, 1960. (Malkani Committee Report)
- Government of India, National Commission on Labour, Report of the Committee to Study the Working and Service Conditions of Sweepers and Scavengers, Delhi, 1969. (Pandya Committee Report)
- Government of India, Planning Commission, Report of the Task Force for Tackling the Problems of Scavengers and Suggesting Measures to Abolish Scavenging with Particular Emphasis on Their Rehabilitation, New Delhi, 1990-91. (Basu Task Force Report)

さらに、三宅博之によれば、インド人研究者によって、Hela、Methors、Bhangisnなどの清掃人カーストについてのつぎのような研究論文が書かれている^{注12}。

- Sengupta, Sadhan, 'The Hela Caste in Calcutta: A Study in Untouchability', In Siddiqui, M.K.A. ed., Aspect of Society & Culture in Calcutta, Anthropological Survey of India, Calcutta, 1982
- Chaudhuri, K.K., 'Changings Status of the Methors in a Municipal Set of West Bengal', Bulletin of the Cultural Research Institute, Vol.X, No.3 & 4. n.d.
- Shyamlal, The Bhangis in Transition, Inter-India Publications, New Delhi, 1984

注11 篠田隆、1995年前掲書

注12 三宅博之、1995年前掲論文

また、T.S.ピライの小説『清掃人の息子』も日本語に翻訳されている^{注13}。これらの研究により、インドにおける清掃人カーストの状況や差別からの解放への取り組みについて、かなり知ることができるようになった。

さて、これらの論文やレポートから、清掃人カーストがどのような位置にあるのかをみると、いずれにおいても、清掃人カーストは、数ある登録カースト（Scheduled Castes）、被差別カーストの中でも最下層に位置づけられ、他の被差別カーストからさえも差別されているということが指摘されている。

例えば、山際素男は、シャムラル博士の『バンギイ・カーストと政治的変遷』（1981年）によって、ラジャスタン州のジョドプール市のバンギイ・カーストのイギリスの統治下の状況を、つぎのようにのべ、「最下層中の最下層カーストとして」、「徹底的にカースト・ヒンズーから"忌み嫌われ"てきた」としている。

バンギイ・カーストはまた肉、動物の屍肉を食し、死人の衣服を着るなど、カースト・ヒンズーの最も"忌む"生活習慣を保持していた。

一九世紀から二〇世紀初めまでバンギイ・カーストが町を歩く時は常に"バヤース、バヤース"（避けて下さい）とかバライスとかいった一言を大声で叫び、ターバンには鳥の羽根を付けてその存在を明示する、とかいった姿はインド中どこでも見掛ける風景であった。

これは、イギリスの統治下の状況である。今はどうであろうか。三宅博之によれば、清掃人カーストであるメトルが主催する結婚披露宴に、カルマカール〔壺造りカースト〕、ナーピト〔理髪カースト〕やドーバ〔洗濯カースト〕が招かれることがあるが、メトルの料理した食事は口にしない、メトルとは別の場所に座って食べる、メトルから水を受け取り飲むことはない。また例え深い友人関係にあったとしても、メトルは台所や宗教施設に入ることを許されていないという^{注14}。これが今、行われていることだ。

一方では、SCへの暴力は日常的に繰り返されている。ダリット・ダニエル・ニャナセガラによれば^{注15}、1990年の一年間だけで、553名のダリットが殺され、788名のダリットの女性がレイプされ、553件の放火、1,570名のダリットが重傷を負う被害にあっている。1986年から1990年にかけてこの数字はほとんど変化がない。

注13 山際素男訳、1986年、三一書房。インド独立以前に書かれたもので、ピライ氏自身は有力地主カースト、ナイヤール出身である。訳者あとがきとして35頁の論文「バンギイ・カーストとインド社会」がある。

注14 三宅博之、1995年前掲論文

注15 ダリット・ダニエル・ニャナセガラ『カースト差別との闘いニャナセガラ交流報告』、1994年日本キリスト教団部落解放センター

これが、インド憲法が制定されてから半世紀が経ち、また保留制度もあり、SCの社会的地位の上昇の方策も講じられながら、同時に、他方では荒々しい暴力的迫害がある。これに対して被差別カーストを横断するダリッド解放運動が組織されている^{注16}。

では、バングラデシュではどうなのだろうか。SCという政策的カテゴリーや保留制度もなく、補償的対策もないため、より *sweeper colony* の人々の社会的地位の向上や社会移動はより困難な状況におかれているのだろうか、それともイスラム社会であるがゆえに、カースト差別の泥沼から這い出ることができたのだろうか。差別との闘いは、どのように展開されてきたのだろうか。これが、バングラデシュに降り立つ前の素朴な問題意識であった。

§ 4. Bandel Sweeper Colony

訪れたのは、チッタゴン市最大の清掃人カーストの居住地である Bandel Sweeper Colony (以下、バンデル地区と表現) である。市の中心部、高等裁判所がある小高い丘のすぐ東側にある。地区に車でつくと、たちまち青年や子どもたちに取り囲まれた。私たちは幾分警戒心をもたれたようだった。思い過ごしかも知れないが、他のスラムでは経験したことのない緊張感が漂った。Chowdhury 教授が来訪の意図をつけ、了解がとれたので、地区内に入った。

道路に面して、門が設けられている。そこが唯一の入り口である。地区の外周に中高層の住宅が建てられ、それらが障壁のようになっており、周辺地区と隔絶されたゲッターのような印象をもった。一歩中に入ると、洗濯する女性たちや道で遊ぶ子どもたちなどの下町風景になる。

私たちは、地区の入り口のすぐ横に建っている中高層の団地の方へと案内された。鉄筋コンクリートの住宅で、日本の集合住宅とあまり変わりのないものだ。階段の踊り場の隅は、赤い色がついている。何かの儀式のためにつけられたのだろう。私たちが招き入れられたのは Chiringi Lal さんの自宅である。入り口のドアのすぐ左手が8畳ほどの居間になっており、清潔なクッション・カバーのソファとイス、飾り棚にはテレビが置かれ、真っ白な壁にはインドの女優のポスターがいくつも掛けられている。掃除が行き届き、明るく美しい部屋である。おそらくバングラデシュでは、ミドルクラス以上の住宅だろう。そこに集まったきてくれたのは、Lal さんのほか6人であった。年齢は30歳代前半がほとんどだ。

Lal さんは32歳。Chittagong Harijan Oikaya Parishad (ハリジャン地区連合会) や Jubo Kallayan Sangha (Youth Welfare Association 青年福祉協議会) の会長をしている^{注17}。Lal さん

注16 ダリッド解放運動については、桐村彰郎が詳しく紹介している。桐村彰郎「ダリッド連帯プログラム報告1994-1995」(1)～(4)、『奈良法学会雑誌』第11巻1号～4号、1998年6月～1999年3月

注17 Parishad は、集まり、シヨミティー、committee という意味、Oikawa は union の意味、集まるとか、一緒になるという意味。

は無口な人だ。よくしゃべってくれたのは、書記長のShayn Babuさんだった。

— ハリジャン地区
連合会や青年福祉協
議会は、どんな活動
をしているのですか？

「地域の発展のために
政府や、市長と交渉
する。女性が、結婚
できなかったら、相
手をきめたり、結
婚式をあげたりし
ている」

— 仕事のことも
とりあげているの
ですか？
「そうです」



Bandel Sweeper Colonyの通りで遊ぶ子どもたち、売店もある。

I.W.C. (Chowdhury 教授の発言はI.W.C.と表現) 「この人は偉い人です。big person, presidentです。ハリジャンはチッタゴンでは、幾つか地区がある。4つか5つぐらいある。この地区は大きいですが。それぞれのショミティに組合がある、その連合の会長です」

— 政府に対して要求するといわれましたが、どんな要求ですか？

「イギリスの時代、おじいさんの頃に、こちらに連れて来られた。その時は、皆、仕事もあったし、住宅も提供された。最近、仕事もそんなにない。市の仕事もあるんだけど、1万から1万5千タカの賄路を入れて、仕事にはいることもある。その仕事が入ったら、毎月、2800～3000タカをもらう。また、ホテルとか、レストランとか家とか、個人的に働いている」

— インドのどこの州から来たのですか？

「UPのKanpur 地方から。イギリス時代、1860年からこちらにきている。清掃の仕事をするために連れてこられた。インドから連れて来られたのだから、市は仕事を保障する義務があると考えている^{注18}」

— インドのsweeperとの連絡はありますか？

「ある」

— インドには、タリット運動があるが、ご存じですか？

注18 三宅博之は、ダッカ市がベンガル州に下水道敷設を要望した理由に衛生問題もさることながら、尿尿処理人の確保の難しさがあげられたと指摘している。三宅博之「ダッカにおける下水処理問題」(H.G.バント他「アジアからのメッセージーアジア、南アジア、そしてインド」) 嵯峨野書院、1999年

「なにも関係ない。解放運動は、ここにはない」

— Dr.アンベドカル、アウトカースト出身で、法務大臣。インド憲法をつくった人ですが。

「そんな人も知らない」

— 清掃の仕事は、請負ですか？それとも市の職員ですか？

「市の職員だ」

— 何人ぐらいが働いていますか？

「240人」

— 少ないですね。この市の規模では、もっとたくさんの人が必要なんじゃないですか？

「この Bandel 地区だけ240人で、他の（ハリジャン）地域も入れると、600人ぐらい」

別の人は800人という。正確な数字はなかなか出てこない。600～800人ということだろうか。

— この地区の人口は何人ですか？

「だいたい3000人ぐらい」

— 家族の数は？

「180世帯」

— えつ、そんなに。

I.W.C. 「彼は間違っているらしい。（やりとりが長く続く）350ぐらい」

— すると、1家族に8～9人とぐらいになりますね。多いですね。

他のスラムでもそうであったが、基本的な数字については、なかなか答えがもどってこない。数字も抽象的な概念操作が必要になるのか、識字能力、学校教育を受けていないためか、数字でものごとを認識する習慣にないのだろうか。

350世帯、3000人が住むというのであれば、平均8.6人の世帯員数になり、意外に多いので、念のために確かめると、親、きょうだいの同居が多いということであった。

チッタゴン市内には、Sweeper Colonyは、他にもある。Madarbari(1600人)、Jhaotala (1200人)、Fringi Bazar (400人)の地区があるという。しかし、これらの数字もどれほど信憑性があるのか、疑問であるが、この地区が最も大きいことは確かだ。

— 清掃の仕事は、2つありますね。一つは市職員、もう一つは民間業者で請負でやる。ここでは、どうでしょうか？

「この地区から240人が市の職員で働いている。その2倍の500人が、民間でやっている」

— 市の清掃事業は具体的には、どのような仕事の内容ですか？

「ゴミをトラックへ積み込み、溝をきれいにするとか。道をきれいにする」

— 大阪市の人口は約260万人で、清掃職員は4000人ほどいます。チッタゴン市では、他のハリジャン地域も入れると、市の清掃職員は600人ということでしたね。ずいぶん少ないですね？

「ここでは、ハリジャン以外にも、新しく清掃労働者（sweeper）になっている。私たちは、昔から清掃労働者だけど、最近ムスリムも清掃労働者になっている」

— その人たちは、何人ぐらいですか？

「2100人ぐらい」

— それじゃ、清掃労働者のなかでは、ハリジャンは少ないですね？

「他の地域からも、ムスリムの人たちが、仕事がなく、この仕事に入っているのです。そこで、われわれの価値が低くなってきている。昔から、仕事とか家とか、全部用意するという政府の約束があったんだけど、政府は約束を何も守ってくれない。だから私たちは、自分たちで、仕事を見つけなければならない。

ムスリムのひとたちが、清掃労働者になるようになってきて、就職の道が狭められてきている。ハリジャンのために、仕事や住宅を保障する約束であったが、何もやっていない。選挙の時には、政治家はやってきて、いいことをいうが、なにもしてくれない」

— 失業している人は何人ほどですか？

「300～400人ほどはまったく仕事がない」

極めて重要な点である。歴史的にはインドのウッタプラデシュ州から清掃労働に従事するために移住させられてきた人々である。そのために住宅も手当されていた。都市化とともに清掃関係の仕事は増大していったのだろう。それにともなって、ムスリムの人たちも清掃労働に参入してきたという。そのために仕事をめぐって競合関係が生じている。

インドでは、都市の増大する清掃労働需要に対して、伝統的な清掃人カーストだけでなく、皮革職や竹籠職などに従事してきた他の被差別カーストが参入してくるようになったという^{注19}。では、バングラデシュでは、どのような階層・出身のムスリムがいつ頃から、清掃労働に参入しているのだろうか。

「ムスリムの人たちは、1万タカ、何千タカの賄賂を払って仕事についているので、私た

注19 「西ベンガル州やカルカッタのチャマル集団は、教育水準の低さゆえに、ヒンドゥー社会で「清浄」とみなされている職業に従事する技能や知識を習得しておらず、代わって自らの伝統的な職業と同程度もしくはより「不浄」と認識されている清掃業への参入を余儀なくされていると言える」（三宅博之、1995年、前掲載（146頁）。

ちには、そんなお金がないから、仕事に就けない」という。これは事実かどうかは慎重に検討しなければならないが、ハリジャンの側からみれば、そのような不正行為によって仕事が奪われているという受けとめ方なのだろう。では、ムスリムとの間に対立関係はあるのだろうか。

— ムスリムの人とは仲がよいのですか？

「ムスリムの人たちとは仲良くやっている。しかし、ホテルやレストランに行くと私たちは入れない。ムスリムの方は入れる。同じ仕事をやっているのに」

— どうしてハリジャンとわかるのですか？

「しゃべる言葉が違う。バングラ語でもないし、チッタゴン語でもない。バングラ語、チッタゴン語、ヒンドゥー語が3つ混じった言葉をしゃべるので、すぐわかる。レストランで注文するときにはわかってしまう」

— 言葉でわかるのですか？服装ではわからないのですか？

「服装ではわからない。ことばで判る」

— それじゃ、レストランでも黙っていれば、わからないのでは？

「注文をとりにくると、わかってしまう」

— 腹が立つでしょう？

「いくらいっても、相手が聞かない。"出て行って下さい"という」

— 政府に対して、抗議とか、要求はしないのですか？

「選挙の時、市長がきて、"あなた達は、皆私のきょうだい、お父さん、お母さん"といいことを言うが、選挙が終われば、何もしない」

I.W.C. 「なかなか、難しい。なぜかというとな社会的な問題だから」

— アメリカの黒人が、1950年代、同じようにレストランやバスの座席で差別され、大問題になった。50年代、60年代に公民権運動をして、差別が撤廃された。それについては、どのように思いますか？

「子どもの時から、そのような扱いを受けてきた。段々とそういう意識（差別だと受けとめる意識）になってきている。組合も考えている。2000年になれば、大きな組織ができて、変わっていくだろう」

— ムスリムの清掃労働者と連帯して、賃上げや労働条件の改善をしたことはありますか？

「昔はあったが、今はなくなった。今の市長は、前は労働組合のリーダーをしていた。（市長は）"一生懸命にやるから、組合はいらない"と言っている。

— レストランの差別に抗議したことはありますか。他に、酷い扱いを受けた経験はありますか？

「市長に"仕事がない、なんとかしてくれ"といった。市長が来て、"それじゃ1ヶ月分の仕事をあげます"と言った。1日60タカ、1ヶ月たつと、仕事がなくなる。そういうことがたくさんある」（これは質問に答えていない、通訳のミスか）

—（ここで市長と交わした文書を見せてくれる）このリストに書かれているのは、一人一人の名前ですか。1ヶ月間雇用するということが書かれているのですか？
「そうです」

インタビューは、チョドリー教授の通訳で行われている。教授は日本語が堪能なので、私たちが日本語で質問をし、チョドリー教授がベンガル語で相手に伝えるというやり方だ。

— レストランに入って行こうとすると酷い扱いをされるのですか？

「実際に、レストランに入るでしょう。私たちのことがわかれば、何も出してこない」

— そんな時、なぜ、出してくれないのかと聞かないのですか？

「座っていても、注文を取りに来ない。何も出してくれない。1~2回行って、出してくれないと、その意味がわかっちゃう。同じことが繰り返されると。もう出してくれないとわかる」

— けしからん。ひどい話ですね。なぜ、そんな差別があるとお考えですか？

「昔、便所は、オープンだったでしょ。壺にいれたり。それぞれの家が乾式便所だったでしょ。ポットの中に入れてたり。そういう糞尿を、私たちのお父さんたち、おじいさんが、掃除したでしょう。そういうところから、汚い仕事をやっているという考え方がずーと入って、今でもそういう意識を皆がもっている。今は新しいトイレでしょう。水洗になっているとか」

— そのような仕事の内容は、ムスリムの清掃労働者と同じでしょう？

「ムスリムの人たちは、そんな仕事、絶対しなかった。ハリジャンだけ」

— ムスリムがsweeperの仕事に就くことに抵抗感はないのでしょうか？

昔、汚い仕事を皆ハリジャンの人たちがやったでしょう。最近、汚くないでしょ。それだから、段々入ってきた。彼ら（ハリジャン）は、昔の世代だから汚い。だけど（ムスリムは）新しい世代だから、いい。

Sweeper Colonyの人たちは、自らを「ハリジャン (Harijan)」と名乗っている。言うまでもなく、ハリジャンは神の子という意味で、ガンディーが名付けた呼び方であるが、Dr.アンベドカルも、ヒンドゥーのカースト制度そのものの是認に基づく欺瞞的な呼び名だと批判し、現在のダリッド運動でも、自尊心のある人間はこの言葉をつかわないとし、抑圧・搾取され

た人々という意味のDalitということばを使う^{注20}。

そのようなこともあるので、「ハリジャンという言葉は皆つかっているのですか」聞いてみた。すると「そうです。皆使っています」と何の問題も感じずに使っている。

清掃労働と差別

— 他で差別されることは？店に買い物に行くとか？

「他のところでは何もない。買い物では、問題はない。映画館でも、問題はない。昔、映画館には、切符を買わなくても入れた。今は切符を買わないと入れない。市の事務所に行ったら、座るところがない」

— えっ。事務所って、どういうことですか？

「市の事務所では、どこにも座ることができない。机、何もないです。外で立って集まっている」

— ムスリムの人たちはどうですか？

「ムスリムの人たちは中に入って、事務所に行って座っている」

— 酷いですね。抗議しなければ。

なんという差別であろうか。市の事務所というのは、清掃労働者の詰め所のことだろう。ムスリムの清掃労働者は、屋内に待機したり休憩したりする部屋があるが、ハリジャンの人々には、そのような場所はなく、外で立っているという。雨期であれば、どうなるのだろうか。明白な差別的取り扱いである。これをどのように合理化しているのだろうか。

— 他に差別を受けることはありませんか？

「ヒンドゥーのお寺には入れない。そのため、ここに私たちだけのお寺がある。今は、ムスリムとは仲良くして、いじめられたりすることはない」

— 個人の家での清掃の仕事は、どのようにしていますか？

「個人的にコンタクトをとって、仕事をする」

— 仕事先の家での扱いは？

「私たちは、もちろん部屋の中に入らないが、いい感じで扱われる。外で水をもらったりする」

— 家の清掃は、いくらぐらいもらうのですか？

「1軒の家を一日中掃除するのではなく、一日5～6軒回る。200～300タカを毎月、一軒

注20 Bhagwan Das, "Dalit Discrimination and Empowerment" connect vol.3, No.3, July-Sept. 1999. チッタゴンでの当事者の表現を尊重して、この小論ではハリジャンと呼ぶことにする。

づつもらうので、5～6軒だったら、月1500～1800タカになる」

— そうすると、平均収入は、いくらぐらいになりますか？

「2000～2500タカほど」

住宅問題

Lalさんが住む住宅は市が建てたもので4階建であり、1フラットに6戸あるから、全部で24戸ある。

— この建物は？

「市政府が建てた。だけど皆、個人的に家賃を払っている。月1200タカほど。電気、ガス、水道も入っている。全部いれて、1200タカ」

— 個人的に支払っているというのはどういうことですか？

「給料から引かれる。私たちは、外の家に住めないのです。だから、市の職員だけ、この家をもらうのです。お母さんとか、きょうだい、親戚だったら、一緒に住むことができるのです」

— この地区は全部で350世帯ですね。そして市で働いているのは240人。すると90世帯の人は市では働いていないことになる。その人たちは、どうしているのですか？

「その人たちは、この家からサテライトみたいに、家賃を出して住んでいる。彼は、この家のオーナーでしょ。彼は1200払っているでしょ。また、彼は、別の人に貸しているのです」

— ということは3つ部屋があれば、そのうち一つを貸すということですか？

「そうです」

— そして、家賃をもらうのですか？

「そうです」

Lalさんの住宅は、2年前に建ったもので、この地区では一番新しい。ベッド・ルームも見せてもらう。ベッドの枕もとには衣装掛けが置かれ、衣服が掛けられている。よこには女神をまつる祭壇があり、壁には女神を描いた絵が掛けられている。

地区内には、老朽化している住宅が多い。地区内を歩くと、「これを見てくれ、こんな状態だ」と指さして示すのは、庇が崩れているところだ。恐らく手抜き工事のためだろう。鉄骨が入っていない。集合住宅は、4階建、3階建、2階建とさまざまである。



Bandel Sweeper Colonyの指導者の住宅の祭壇、整頓された部屋

トタン屋根の平屋のバラックもある。古い住宅は、パキスタン時代のものだという。

棟と棟との間が、8メートルほどの道路になっており、まるで緑日のように人が多い。

家の前では、母に体を洗ってもらっている子。裸で遊んでいる子。バトミントンをしている子。屋台で駄菓子を買っている子。共同のポンプの回りでは洗濯している女性たちの井戸端会議。2階建の住宅は、入口が開け放たれ、ブタが自由に出たり入ったりしている。まるでペットのような扱いだ。特に困りがあるが飼っているのではない。道にも家にも入り込んでいる。住宅の裏の溝にはブタが、人糞を食べている。道路にも人糞が落ちている。それをブタが掃除してくれるのだろう。そのような光景をみれば、ムスリムならずとも、ブタを汚れていると思うし、ケガれた存在として避けたい。ケガレ意識は、そのような実態を反映したものであり、空虚な観念ではない。高邁な宗教家が深淵な思想から、ひねり出したものでもない。現実の世界だ。

— ムスリムの清掃労働者にはこのような住宅はあるのですか？

「ない」

— どうしてですか？

「彼らは、外の住宅に入ることができるから。私たちは、外では住むことできないから」

これも典型的な差別である。居住の自由が社会的に認められていない。この地区の住宅は、職員住宅的要素が強いが、ムスリムの清掃労働者には市営住宅がないとすると、差別に対する補償的措置といえる。だからハリジャンの人々は、政府の指示によってインドから移住させられたという歴史的記憶とともに、政府は、職と住については保証すべきであるという認識をもっている。

他のところには自由に住めないという。今も、住めないというのは本当なのだろうか？この点の検討も必要である。

結婚問題について

— 結婚について、お聞きします。さきほど、この組合の活動をお聞きした時に、結婚紹介をあげられましたが、どうしてそのようなことをされるようになったのですか？

「この地域は小さい地域でしょう。若い人を紹介して、結婚させようと。会って、もし話が合って良かったら、結婚を決めて、結婚式をあげて、皆で祝う。結婚式も皆一緒にね。皆集まって、食事する」

— 同じヒンドゥーの人との結婚はどうですか？

「sweeper同志の結婚で、他との結婚は一つもない。全くない」

— もちろん、ムスリムとの結婚もないでしょう。すると sweeper同志の結婚になるが、

どのあたりまでの通婚圏でしょうか？

「ダッカとの結婚もある」

— かなり遠いですね。バングラデシュ全体では、sweeperの地区はどれぐらいありますか？

「はっきり判らないが、ダッカの場合、こちらより多い」

— 身近な人では、どこから相手を求めているのでしょうか。例えば、会長は？

「私は、この地区の人と結婚している。私はこちらの人。彼はダッカの人と」

— この地域での一番の課題は何ですか？

「仕事だ。それが一番。そのつぎは、家の問題。ここは自分の家ではない。何世代まで、ここにいるかが問題だ」

「人間的な仕事があるのだけど、いろいろな機械が入っているでしょ」

— 合理化のために、仕事がなくなってきているという意味ですか？

「そうです」

教育について

— つぎに教育のことをお聞きします。会長さん、あなたには何人の子どもさんがおられますか？

「2人男、1人女。上は4年生と2年生（7歳）」

— 子どもは、どこまで学校に行かせたいですか？

「お医者さんに、できればさせたい」

— それでは、あなたの場合は（と別のメンバーに聞く）？

「子どもは、2人男、3人女。上は10歳。2年生。学校は行っていない。子どもが小さいから、その面倒をみて、学校には行っていない。家で個人的に勉強している」

— 字の読み書きは？

「できる」

— あなた自身は、学校にどこまで行きましたか？

「小学校5年生まで行った」

— この近くにNGOの学校はありますか？

「NGOは、こちらでは井戸とかトイレとか、道路とか、いろいろなことをやっている」

— 学校はやっていないのですか？あなたは、学校はどこまで行かれましたか？

「中学校1年まで」

— 子どもは何人ですか？

「5人、一人男と4人女。一番上は19歳、男。仕事は、市の職員。清掃労働者です」

— 他の子どもたちは何をしていますか？

「私は22歳。6年前に結婚した。1人男、1人女。2年半と4ヶ月。小さくて、まだ学校に
いっていない」

— 子どもは、どこまで学校に行かせたいですか？

「まだ、小さいから、何も考えていないけど、大きくなったら、考えます」

— この地区の子どもはあまり学校に行っていないですね？

「この地域の人たちの特別な学校があるの。外の学校では、いじめられるから、行かないの。外の学校に行くには、名前を変えなければいけない。名前で、すぐsweeperだと判ってしまうから」

— 名前を変えて、外の学校に行った人はいますか？

「たくさん、いるんだけど。別のところに住んでいる」

— それについては、どのように考えますか。良いことか悪いことか？

「悪いと思っている」

— どうして、悪いのですか？

「自分の地区とか、仕事とか、伝統を守って、この地区をよくしていくべきだ」

— それは、大切なことですね。では、地区内にある学校というのは、質はよくないの？

「3人の先生がいて。まあ、まあ、結構。大したことない」

— 1人の先生が、いくつもの学年をみているの？

「180人の子どもたちを教えている」

— 何時から何時まで？

「夜の6時から8時まで」

— どうして、そんなに遅くやるのですか？

「実際、その先生も名前を変えて、別のところに行っているみたい。塾みたい」

— 毎日、やっているのですか？

「その先生方も、この地区の出身で、高校を卒業して、先生をやっている。市から給料をもらってやっている。月500タカ」

— 安いじゃないですか？他の時間は何をやっているのですか？

「カレッジに行っている。学生です」

— 地域をよくし、差別をなくすには、こどもに教育をつけるのが一番です。教育はとても重要です。がんばってください。

§ 5. Cox's Bazar Sweeper Colony

コックス・バザールの Sweeper Colony も尋ねることができた。コックス・バザールはチッタゴンから南に約150キロ離れたリゾート地である。人口5万4千人^{注21}。コックス・バザールのImageの第4診療所の医師Dr.Smir Dasと医療補助員のNilima Chakrabartyさんが案内してくださった。Das医師はバイシャ・カースト出身であり、Chakrabartyさんはブラーマン・カースト出身である。

聞き取りを行ったのは、村の長老であるNotolal Sardarさん（75歳）とその弟のNamkito Boloram（45歳）さんである。家の前にイスをおいて話を聞いたため、私たちの回りを、老若男女20人ぐらいが取り囲むから、まるで集会のような感じになる。

150年前に、UP(ウッタープラデシュ)のキャンブルから2～3人、こちらに連れてこられたのが、この地区の始まりで、それから世帯が増えた。非常に生活が苦しい、こまっていると、Notolalさんは、こちらが質問するより前に語りだした。

就労について

— この地区の世帯数はどれぐらいですか？

「地区は18家族。人口はおよそ150人」

— 少ないですね。どのような仕事をされていますか？

「清掃の仕事をしたり、道路の清掃。20歳以上の男性は、50人ぐらい。そのうち22人しか仕事がない。市に雇用されている。ポリショバだ。（これはその職種を意味しているらしい）。給料は月に900タカ」

I.U.C「これはひどいね」

— チッタゴンとかなり差がありますね。

「これだけでは生活できないので、プライベートに家の清掃に行ったり、力車をやったりしている。夜、日雇労働をしたりしている。苦勞している」

— 市に雇われているムスリムのスイパーは、何人ぐらいですか？

「10～14人ぐらい」

— その人たちの給料、労働条件は同じですか？

「50人ぐらいいるけど（前の数字と違う。ハリジャンが10～14人、ムスリムが50人ということか）。収入は1250～1500タカまでもらっている。（給料に差があるのは）彼らは住宅とか、設備がないから」

— Notolalさんは？

注21 1991年の人口。1997Statistical Yearbook of Bangladesh,18th ed

「私は1200タカもらっている。同じ仕事でも、昔から入っている同じ歳のムスリムが1800タカもらっている。なぜ彼の方が高いのか、いろいろ文句を言っているのだけれども、聞いてくれない。もう死にかけの老人のいうことなど、聞いてくれない。いつも行っても、市長とか偉いさんは、やるやるといっても（口先だけ）。私の一番の願いは、皆を仕事に就けさせること。市長や市の偉いさんは、ムスリムの人たちに（清掃の）仕事をあげる。イギリス時代から、政府がスイパーの仕事をさせるという約束で（私たちを）連れてきた。だけど、市長は、皆に仕事をさせていない。市長は、選挙の前にいろいろなことを（約束を）言うのだけれど、実際には何もやってくれない」

ここでも、ムスリムが清掃労働の参入してきている。そのために失業問題が大きな問題となっている。インドから連れてきたのだから、仕事を保障して当然だという意識が強くもたれているのは、バンデル地区とまったく同じだ。

また、住宅も市の提供である。ムスリムには住宅は提供されていない。ムスリムとの賃金格差はそのためであろうか。チッタゴンの場合は賃金は1200タカであったが、それも家賃の天引き前か後かの違いであれば、そう大きな違いはない。ムスリムとの賃金格差にNotolalさんは強い不満をもつが、雇用形態の違いや賃金表が別建てになっているとか構造的なものなのだろうか。

市の提供している住宅であるが、バンデル地区と比べると随分みすぼらしいものだ。トタン葺き、壁材は竹の平屋である。



Cox's Bazar Sweeper Colony の入り口付近の光景、豚が放し飼いされている

住宅、設備について

— この住宅は、どうなっていますか？

「昔は水の問題があったが、今は全部政府がやっている。これは、全部市が建てた家。今は井戸があるが、便所はないし、家の設備もよくない。家賃は自分では払っていない。

雨が降ると、雨漏りがする。家はすごく汚くて、誰も掃除をしない、そういう問題がある。雨漏りや壁が崩れ、修理は市の仕事だけど、市にいても、なかなかしてくれない。電気もない。ガスもない。薪で炊事をしている。井戸は6つある。水の質はとていい」

水質はよいというが、この近くのホテルで休憩したときに出された水は少し塩の味がした。このあたりで一番上のクラスのホテルだ。それから推測すると、Cox Bazarの水質はあまりよくないのかもしれない。

— トイレは共同ですね。どうされていますか。

「トイレは2つあるが、酷く悪い状態である。朝の時間は、混雑する（聞き取りにくい）」

— 女性はどのようにしているのですか。

「市のトイレが1つある。1タカ払って利用する。市は、3～5年の管理権をオークションで委ねる。3万2千タカで落として、村で管理。（1日に）50～60人の女性が利用している」

— 市に対する要望は？

「一番は家の問題、2番目は仕事、3番目は子どもの教育」

有料トイレがあるという。公設民営というべきものか、興味深い方式である。市は、管理を落札方式で第三者に委ねる。50人が365日利用すると18,250タカ、3年では54,750タカ。落札価格32,000タカをここから引くと、残るのは22,750タカ。ここから清掃費用や維持管理費などを出さなければならない。清掃や管理に一人をあて、仮にその賃金を900タカとすると、1年間の人件費は10,800タカ。つまり、月900タカの人件費を払うとなると、大幅な赤字になってしまう。一方、村の女性は一人あたり少なくとも30タカは使用料を払わなければならない。トイレがどのようなものかは、残念ながら見ておかなかつたし、トイレの建設費もどれぐらいのものか聞き逃したが、おそらくこの公設民営の有料トイレは、市には利益をもたらすものの、地区住民には有り難いものではなさそうだ。子どもは溝に排便し、それを放し飼いされているブタが食べるという光景はここでも見られた。

教育について

— 子どもの教育はどうですか？

「子どもたちは皆、外の学校に知っているが、嫌われたり、叩かれたりするのでは、行かない。学校に行っている子が少ない」

— 今学校に行っている子はいますか？いたら、前に出て来てください。

(皆から、"おい、お前だ、出る" と言われたのだろう。恥ずかしそうに出てきた少年に尋ねた)

— 名前は、なんといいますか？

「Krishna Harigon、13歳（中学2年）です」

— 学校ではいじめられたりしますか？

「学校では、"お前は、ハリジャンの子どもだから、学校に来るな"と言われたり、叩かれたりすることがある」

— 他のムスリムの子と遊んだりしますか？

「少しぐらいは遊んだりする。皆ではないが。先生の中なかでも、半分ぐらいの先生は、よくしてくれるが、半分ぐらいは嫌いだという態度を見せたりする」

(横にいた大人が、口をはさむ)

「彼を学校に入れる時は、ムスリムの市の役員（学校の理事か？）に、沢山のおみやげをもっていったりして、すごく大変だった」

— あなたと同じ歳の子は何人いますか？

「16人いる」

— そのうち学校に行ったのは、何人いますか？

「ボク1人だけ。他の子は、皆仕事をしている」

— どんな仕事ですか？

「漁師、メイドなどの仕事をしている。たいていは4～5年でやめる」

— 将来何になりたいですか？

「エンジニアの仕事をしたいから勉強している。高校にいきたい」

— 学資は、どうしますか？

(長老が)「今のところはないが、なんとか皆でお金を出し合って、協力して学校に行かせたい。皆の希望だ」

(もう一人、前に出てきた少年に尋ねる)

— あなたの名前は？

「Swapan Harigon、10歳です」

— 学校でいじめられますか？

「"なぜ、こちらの学校に来たのか"と言われる」

— 先生はやさしいですか？

「先生は、ボクたちを好きでないみたい」

— 同い年の子は何人いますか？

「10人ほど」

— そのうち学校に行っているのは、何人ですか？

「6人ほど」

— あなたは、将来、何になりたいですか？

「医者になりたい」

— きょうだいは何人ですか？

「2人男、2人女。皆、学校にいつている。勉強はたのしい」

— お父さんの仕事は？

「市の清掃職員です」

（もう一人の少年に尋ねた）

— あなたの名前は？

「Tapan Dasです。9歳（小2）」

— 学校は楽しいですか？

「楽しい」

— 先生はやさしいですか？

「悪い。30分ほど教えて、帰ってしまう。熱心に教えてくれない」

— 将来は何になりたいですか？

「先生になりたい」

（つぎに、Namkitoさんに聞く）

— 子どもに教育をつけることについて、どのように思いますか？

「今の生活は幸せでないから、子どもたちにもっと勉強させて、幸せになってもらいたい」

— 今まで、教育をうけて、いい仕事についた人はいますか？

「いない。カレッジに行った子はまだ一人もいない。これまでの最高の学歴のもちぬしは、村長の息子。彼は、高校を卒業して、チッタゴンでトラックの運転手をしている」

学校での差別は露骨である。「ハリジャンの子どもだから、学校に来るな」と言われている。10歳のSwapan君に「先生は、ボクたちを好きでないみたい」といわせるほど、また9歳のTapan君が「30分ほど教えて、帰ってしまう。熱心に教えてくれない」というほど教師は冷淡である。これを聞いていて、水平社創立大会で山田孝野次郎少年が「先生のひとみは何んと云ふ冷たいものでしょう」と訴えたことを思い出した。部落の子どもたちにとって学校が差別を初めて体験する場であったのと同じような状況なのだろう。いや、それ以上に厳しい。Krishna君が中学校に行くにも、役人に袖の下を渡さなければならない。

けれども、異口同音に子どもたちは、「学校は楽しい。勉強はおもしろい」という。学校に行けるだけでも、他の子どもたちより恵まれていると感じているのだろう。小学校低学年では学校に行けても、中学になると就学者は例外的だ。Krishna君がカレッジに行けるように切

実に願った。

差別について

— チッタゴンの場合では、外に住む場合、学校に行く場合、名前を変えるという話でしたが、ここではどうですか？

「ここも、同じだ。名前を変えて、例えば、ハリジャンの名前、ダスを（別な名に）変える」

— 名前を変えなければ、学校に行くのは難しいのですか？

「できないことはないけど、ただ、いろんな人がいるからね。悪い人もいるからね。皆、いい人じゃないから」

— あなたたちは、差別されたという体験をおもちですか？

「市内の人たちは、私たちが嫌っているけれども、この地区の人をいじめたりすると、掃除をしてもらえないので、悪いことしたり、差別したりしない」

— レストランに入れますか？

「昔は入れなかった。最近は、ムスリムの人でも清掃労働者になっているから、"なぜ、ムスリムの清掃労働者は入れて、どうして、我々は入れないのか"と抗議した。今、(レストランに) 入ることは自由になった」

— 同じ水を飲むことを嫌うことがインドではあるとありますが？

「ここでは、なにも問題はない」

— どうしてですか？

「給料が安いとか、収入が安いけど、なぜ、(付き合いがうまく) できているかという、地域の人たちは、子どもの教育とか、結婚式とか、病気になった時とか、ヒन्दゥーでも、ムスリムでも皆、助けて合っているからです」

— ここの地区の人が、外で住もうと思ったら、できますか？

「お金があればできる」

— 土地は売ってくれますか？

「売ってくれる」

— 同じヒन्दゥーの人たちから差別されることはありますか？

「なにもない」

— ここではレストランに入れるという話ですが、チッタゴンでは、入れないと聞きました。どうして違うのですか？

「ここの県の一番上の管理者、deputy committeが、ムスリムやヒन्दゥーが同じ清掃労働の仕事をやっているのに、なぜ、ハリジャンだけがレストランに入れないのかと、(その不合理性を認識し) それを(市民に) 通知した。法律じゃなくて、声明みたいな

ものを作って知らせた。それから、皆誰でもレストランに入れるようになった」

— それはいつごろのことですか？

「Bangladeshの独立の前のこと。(言い直して) 独立の後から、こういう状態になっているということです」

— どちらですか？

「独立後のことです」

— 周辺の人たちとうまくやっていますか？

「ブタ(を飼っているの)は、この地域だけです。周囲はみな、ムスリムのパラ(para=neighborhood)でしょう。そこへブタが入って行って、昔は、すごいやがられたけど。今は、いやだってこと誰も(露骨に)言わずに、だだ"出して下さい"というだけ。柵が壊れたりすれば、(ブタが出ていかないように)修理したりしています。」

清掃カーストの人々に対する差別については、一元的な解釈はむずかしい。ヒンドゥーの人々の間での差別はないという。周辺のムスリムの人たちの間でも、差別はないという。土地の売買、地区外に移り住むことにも問題はないという。チッタゴンで聞いたレストランでの差別もないという。



Cox's Bazar Sweeper Colonyの長老、聞き取り調査の場面

それには、Pakistanからの独立後、市の首脳部が出した差別撤廃宣言のようなものが、変化をもたらしたという。聞いたかぎりでは、Cox's Bazar という一地方に限定されたものであるが、それはどのような文面のもので、どのような経緯でだされたのか、調べてみる必要がある。

他地域のハリジャンとの連帯について

— 独立戦争の時には、ヒンドゥーの人が襲われたという話を聞きますが、ここはどうでしたか？

「(かなり長い語りがあるが、通訳はしてくれなかった) ここでは何も問題なかった。この町では、ハリジャンだけは何もされなかった。Pakistanの軍人は何もしなかった。他のヒンドゥー人たちは襲われたりしたが。それで(ガソリンスタンドや店を経営して

いた) ヒンドゥー人たちは、店や家、家財をおいて、インドに逃げていった」

— UPのハリジャンとの交流はありますか？

「いろいろと。付き合いは、ずーとやっている。同じ仲間だから」

— ダリッド運動はご存じですか？

「こちらは何もできない。(詳しいことは) 知らないけど、こちらではそれは出来ない。出来ない。人が少ないから」

— チッタゴンやダッカの人との交流はありますか？

「ある」

— ハリジャンの人たちの集会のようなものはありますか？

「こちらでは、Parishadとか、ショミティとかいうものはない。特にチッタゴンと付き合いは深い。(彼らから話を聞いて) チッタゴンの市長はハリジャンに対してすごくいい対応をしてくれている。チッタゴンの市長は、いろんな住宅や設備を彼らのためにつくった。学校とか。もちろん、彼らはそれに満足していないけど。仕事がなくなって、40万タカくれるとか。市長がね。あとは突然、事故や病気になったりしたら、保障するとか、定年になれば、20万タカとか、10万タカをあげると約束したり。(それに比べると) こちらの市長が何もしてくれない。まず、トイレを改善してほしい」

ここも、イギリス植民地時代にウタープラデシュのキャンブルから連れてこられたという。チッタゴンと同じである。そのためか、チッタゴンのハリジャンとの結びつきは強い。聞きのがしたが、通婚関係もあるのだろう。だから、市長の対応もよく話を聞いて知っているようだ。かれらにしてみれば、チッタゴンの市長は、よくやっているという評価である。選挙になれば、やってきていいことを言うというのはチッタゴンもコックス・バザールも同じである。ということは、選挙という民主主義の制度によって、市長もハリジャンの人々の声に耳を傾けるというポーズをとらなくてはならなくなったということである。そういう意味での権利の主張の基盤はできている。

けれども、ダリッド解放運動のようなものには、一線を画している。それはインドからパキスタンの独立、パキスタンからのバングラデシュ独立という複雑な政治的關係に影響されたものか、バングラデシュでのハリジャンの政治的社会的位置によるものか、あるいは少数者のなかの少数者という複合した力關係によるものなのだろうか。将来もそうなのだろうか。

§ 7. Bandel Sweeper Colony の夜間学校の青年教師

バンデル地区では、夜間学校を開いている。そこで教えている青年の話は是非聞きたいと Chowdhury 教授に無理を承知で頼んだ。その結果、ようやくチッタゴン滞在の最後の日の夕刻、Image 本部で Bindu Kumar Das さん (20歳) と Mohan Kumar Das さん (20歳) の話を

聞くことができた。

夜間学校は、以前にあったが、長期間閉鎖されていた。今度の市長になって、「学校にいけない子どもたちに、少なくとも字の読み書きぐらいは教えたい」と1996年11月から始められた。1年から5年までの175人の子どもを、3人の教師が教えている。そのうちの2人が彼らである。冬は4時から6時。夏は7時から9時までの2時間で、授業は30分単位で、3人の教師が交代して、ベンガル語、英語、算数を教えている^{注22}。市から支給されている手当は、550タカで、今月になった50タカが賃上げされたということだった。

二人とも現在カレッジの学生で、Binduさんは商業を、Mohanさんは人文を勉強している。学資は父や兄が出してくれているということで、どこからも奨学金をもらっていなかった。父や兄は、市の清掃労働者である。

彼らは、カレッジを卒業すれば、さらに大学に進学したいという希望をもっている^{注23}。バンドル地区ではじめてカレッジに進学した青年であり、彼らはいわばバンドル地区の希望の星なのだろう。同学年でも高校に進学したものもいるが、多くは中退しているという。Binduさんは、地区外にあるジョロダス小学校、中学校は普通の公立学校を卒業している。そこでその学校に行くにあたって差別はなかったのかを聞いてみたところ、先のバンドル地区のChiringi LalさんやShayn Babuさんたちの話と随分違っていた。

まず、学校では差別を経験していないということだ。

— ジョロダス小学校というのは私立学校ですか？バンドル地区の中にある学校ですか？

「私学です。学校は、地域の外、ちょっと離れたところにあります」

— ジョロダス小学校というのはsweeperだけが行っている学校ですか？

「一般的な学校です^{注24}」

— そのような学校に行くのは難しいと聞いていますが？

「なにも差別は体験しませんでした」

— 中学校は、公立ですね？

「中学校と高校が一緒になっている city cooperation がやっている学校です」

「カレッジも最近は公立です」

— 中学校や高校では、何人ぐらいsweeperの人たちが行っていたのですか？

注22 ヒンドゥーの習慣に合わせて金曜日は休んでいる。

注23 2年制のカレッジを卒業した場合は、大学は4年制の大学に進学することになり、4年制のカレッジを卒業した場合は、大学は2年間になる。Binduさんは3年生、Mohanさんは2年生である。

注24 「一般的な」と答えているが、佐藤彰男氏の指摘によると、ジョロダスという校名からして、ヒンドゥーの生徒を対象とした学校の可能性が高い。

「15人ぐらい。私の行っているあいだに中学校や高校に入ってきたが、途中でやめた人が多い」

— コックス・バザールでは、学校にいけば、“どうして来たのか”といやがらせを言われるということを知りましたが、あなたはそんな体験をしましたか？

「何もそんなことをいわれたことながない」

— バンデル地区のリーダーたちの意見と違いますね。

「私自身は、そんな経験はないけれども、そうした（差別された）体験をもつひともいる」

— そうですね。

「前の学校では、そんな体験したことがある」

— どんな体験ですか？

「私自身のことではないが、“来るな”といわれた人がいた。皆で（学校に）抗議にしに行った。私もそれについて行った。そしたら、（学校側は）“自由に入ってください”という話に落ち着いた」

— レストランに行ってもサービスを受けられないという話を聞いたのですが、それについてはどうですか？

「そういう問題があったんだけど。今度の市長が、そんなことがあればレストランを営業させないとか言ってくれたので、今のところ、そんなことは起こっていない」

— サービスを受けられないのは、ベンガル語とチッタゴン方言とインドの言葉がまじった方言で、すぐわかるということだと聞いたのですが、あなたの言葉はどうですか？

「実際、インドから来たので、方言がまざっている。それは悪いことだ。この地域に住んでいる限り、ベンガル語を憶えなければいけない。その言葉を話せば、何も問題ない。私はもちろんベンガル語を話している」

さらに興味深いことは、Bindu Kumar Das さんは家庭教師のアルバイトをしている。注目されるのは、教えているのは、ムスリムの子もいればボイショ（バイシャ・カースト）の子もいるということだ。

「私は、ムスリムの人も家庭教師をしている。10人ほどの子どもを教えている。200タカずつで、2000タカの収入になる」

— どれぐらいの時間教えているのですか？

「一人1時間から2時間。朝3人一緒に教える。また2人一緒に教えるという具合に」

— あなたはバンデル地区に住んでいるのですね？

「そうです」

— 教えている子どももバンデル地区の子なのですか？

「ムスリムの子どもです」

— ムスリムの子どもがバンデル地区に勉強を教えてもらいにやってくるのですか？

「そうです。問題ないです」

— それじゃ、随分変わってきたのですね？あなたの教えている子どものうち、何人がムスリムですか？

「2人です」

— あとはヒンドゥーですか。そのカーストは？

「3人はボイショです」

— その子のお父さんの仕事は？

「銀行で働いている。一人は刑務所で水道の機械作業員。もう一人も同じ仕事」

— あなたの家に来るのですか、それともあなたが子どもの家に行くのですか？

「4人はうちに来るが、あとは子どもの家に行く。ムスリムは子どもの家に行く。3人は外に行く」

二人の学生の話の聞いていると、バンデル地区に対する差別はなくなってきているようだ。そういえば、Chiringi Lalさんの自宅で話をきいた時に、7人が集まったが、そのうちの一人はムスリムであった。職業は大工で、たまたまその日は遊びに来ていたので参加したということだった。そのような偶然のことで、友人ネット・ワークがハリジャンだけに限らず、ムスリムにも広がっていることがわかった。このこと自体、Chowdhury教授にとっては驚きだった。現実には、大工の友人や家庭教師の例からもうかがえるようにバンデル地区に出入りするムスリムも現れるようになってきているようだ。

— カレッジから大学にいったら、就職するときには差別なく就職できると思いますか？

「勉強すれば、就職できると思っている」

— 立派な仕事について、今までどおり、sweeperの人と付き合い続けますか？

「いくらいい仕事についても、私はバンデル地区に住み、皆と付き合い続けたいと思っている。また、よその地区に住むようになって、付き合うのは当然のことだ」

— 外に家を借りるとか、住むことになった時に差別があると思いますか？

「まだ、やってみていないから、分からない」

— 就職したあと、あなたのお父さんがsweeperだということを人に話しますか？

「皆に言う。父の職業はsweeperだけど、Bangladeshの国籍をもっている。私は

sweeper はやっていない。お父さんはお父さんだ」

— 結婚は、お父さんやお母さんの紹介した人としてますか？

「お父さんやお母さんが決め人が、一番大事だ」

— たとえば、大学で素敵な女性に出会って、好きになったら？

「自分で自立できているかどうか、それをまず考える。つぎに愛情だ。自分で自分の立場を考えて、判断しなくてはならない」

— お父さんの世代は差別は厳しいといっているが、あなたは差別はそれほどではないと言っている。差別は克服できるとあなたは考えている、そう理解してもいいですか？

「そのとおりです」

この青年たちは、つとめてハリジャンに対する差別がないように語っていた。コックス・バザールの少年たちの学校の教師たちに対する見方と随分ちがっている。バンドル地区の清掃労働者とも違っている。何が、そのような違いを生み出しているのだろうか。

バンドル地区で初めてカレッジに進学し、バングラデシュではエリートである大学への進学を目指している。社会的上昇を達成しようとする前向きの姿勢がそのような見方を生み出しているのだろうか。我々には、差別というネガティブな側面を語りたくなかったのだろうか。いずれにしても、現実であろう。多様な現実の姿の切り取り方が違うのだろうか。

§ 8. 今後の課題

今回の予備調査は、今後の本格的調査の可能性を探ることを目的とていた。そのため、スラムやスコッターなど、チッタゴンの貧しい人たちが住むところや、労働の現場を精力的に見て回った。その中でも、一番私が引きつけられたのは、ヒンドゥーの清掃カーストの人たちであった。バングラデシュではヒンドゥー教徒はマイノリティである。さらに清掃人カーストはヒンドゥー教徒のなかでのマイノリティである。

今回の訪問で、sweeper colonyの人々の輪郭が、かなりはっきりと浮かびあがってきた。その結果、いくつかのことながら今後の解明すべき課題として整理できるだろう。まず、第一は清掃カーストのバングラデシュ社会の位置である。バングラデシュ社会でも、漁民や洗濯人、屠場労働者などに対して社会的な差別があるといわれている。そのような被差別集団のなかで、清掃人カーストがどのような位置を占めているのか。インドのように他の被差別集団からも差別され、最も厳しい差別を受けているのだろうか、

レストランでの差別の話は、極めて重要な意味をもっている。バンドル地区の指導者たちは、それを私たちに語ってくれたが、コックス・バザールの長老やバンドル地区の夜間学校の青年教師は、そのような差別はないと否定した。

なぜ、このような食い違いが起こったのか。第二の課題は、認識の差異を生み出すものは何かである。この話は、バンデル地区の指導者たちに私たちが根ほり葉ほり尋ねて、出てきたもので、受けとめ方は、どちらかというところ「そんなものだ、今更いってもはじまらない」という受動的なものであった。だから、決して差別を強調するために語られたものではない。また「許せないもの」として強く訴えるという文脈で語られたものでもない。

また、学校での差別も、コックス・バザールの子どもたちとバンデル地区の学生との間には、かなりのずれがある。コックス・バザールの子どもたちは、ありのままを語っているようだが、バンデル地区の学生の場合には、差別をあまり強調したくないという感じがした。sweeper colonyでも珍しいカレッジ進学者であり、これから社会的上昇をめざしている青年だからそうだったのか、この点はまだ、印象にすぎない。自分（個人もしくは集団）の社会的位置をどのように認識するのかが、その人の今いる位置や今後の社会的移動の見込みがかなり大きく左右しているのではない。

さらに、そのような状況認識が人によって異なるというのは、状況の解釈の枠組みそのものが共有されていないということを示しているということなのだろう。それと同時に、状況が大きく変動していることを示しているのだろう。第三の課題は、変動の過程の解明である。今のバングラデシュは「目に見える差別」から、「目に見えない差別」への移行の過程としてとらえられるのだろうか。変動を生み出しているものは、何だろうか。近代化、都市化、モスリム化、バングラ・ナショナリズム、市長の政治姿勢によるのか、被差別当事者の強い働きかけによるのだろうか。

第四の課題は、領域による変化のずれ。差別といっても領域によって、変化のスピードには違いがあるだろう。Chowdhury教授は、幼い時に、水を汲んだ壺にハリジャンが触れただけで、「その水を捨てろ」と祖父からきつく叱られた体験を語ってくれた^{注25}。コックス・バザールでは水にまつわるそのような差別は、今はないという。

けれども、学校での差別はある。級友からの差別だけでなく、教師もあからさまに差別をしている。進学するとき、地区外で住むときには名前を変えたほうがよいと考える人は少なくないようだ。

「差別があるか、ないか」こういう質問をする時、常に問題になるのが、「差別」のとらえかたが人によって異なることだ。だから、抽象的な聴き方ではダメだ。できるだけ具体的な事実として聞いていかなければならない。たとえば、結婚差別では、これは質問以前の問題である。親や親類の紹介による結婚がノーマルな形態で、いわゆる自由恋愛などは、例外中の例外であろう。他の宗教のものや、他のカーストと結婚することなど頭から考えていない。そのような可能性は非現実的なものとされている。配偶者選択では、われわれ外部のものに

注25 野口道彦「バングラデシュの貧困、マイノリティそしてカースト」『解放研究しが』第3号、1993

は「見える差別」であるが、当事者にとっては、あまりにも自明でありすぎて「見えない問題」となっている。

「学校での差別は？」という質問について、バンドル地区の学生は、強制力をもつ教師や校長などが「学校に来るな」といったことは差別として受けとめるが、教師の冷やかな対応や級友のいじめなどは差別として受けとめていないという可能性も十分考えられる。ハリジャンに対する差別が、どのような場面で、どのような形態で、どの程度みられるのか、もっと細かく聞いてみる必要があるだろう。

第五の課題はムスリムの清掃労働への参入がもつ意味の解明である。インドでは、清掃は最不浄の職種として忌避され、他の不可触民からの参入はないとされている^{注26}。ムスリムが清掃労働へ参入してきているとすれば、ムスリムとヒンドゥーでは清掃労働への忌避感に違いがあるのだろうか。それとも清掃労働に対する人々の見方が、大きく変化してきたということなのか。

確かに、都市人口の爆発的増加によって清掃事業量が増大し、清掃労働者の需要も増えてきている。とすると、どのような社会階層のムスリムが清掃労働に参入してきているのだろうか。ある特定のグループ、ある特定の地域出身に限定されているのだろうか。市の清掃労働は、どのようにみられているのだろうか。安定した職として、賄賂を出しても就きたい仕事としてみられているのだろうか。リキシャのような仕事と比べて、庶民階層の間でどのように評価されているのだろうか。ムスリムの清掃労働者は、ハリジャンの清掃労働者を仲間だと思っているのか、それとも、自分たちより一段下にみているのか。

こうした問いがつぎつぎと湧いてくるが、これらを明らかにするためにも、清掃労働をひとくくりにしてみるのではなく、それに含まれるさまざまな職種、分業関係を明らかにする必要があるだろう。これが第六の課題である。

篠田隆によれば、清掃労働は、1) 道路・家屋清掃、2) 排水路・下水道清掃、3) 便所清掃(水洗式公衆便所、乾式便所)、4) 病棟清掃、5) ゴミ回収運搬、6) 動物死体運搬処理などに分けられる^{注27}。チャッタゴン市では、どのような区分が行われて、何人が雇用されているのだろうか。

下水道施設が完備すれば、尿尿の処理は、人手にたよらなくてもすむ^{注28}。首都ダッカです

注26 篠田隆によるとアムダーヴァード市の場合、清掃員の99%が不可触民であり、バンギーに属する。他の不可触民ジャーティーの参入を見ないのは、最不浄の職種として忌避されているためである。篠田隆、「西部インドの屎尿処理とバンギー」(大野盛雄、小島麗逸編『アジア刷考』勁草書房、1994年)および篠田隆、1995年、前掲書、82頁

注27 篠田隆、1995年、前掲書、91頁。インドのアムヴァード市清掃常雇労働者9,500名のうちわけは、道路・便所清掃5,800人、廃棄物処理500人、排水関係1,000人、病院関係2,200人である。(305頁)

注28 村山真弓によれば、下水道施設が存在するのはダッカのみに限られている。ということはチャッタゴン市にはまったく存在しないことになる。村山真弓「ダッカの都市化と下水処理」(大野盛雄、小島麗逸編『アジア刷考』勁草書房、1994年)

ら、下水施設は人口の20%をカバーするに過ぎず、30%が浄化槽付きのトイレを利用し、10%が掘穴式トイレ、5%がバケツ式トイレ、35%がトイレ設備がなく池や溝で野糞をしているという状態である^{注29}。

表2. 便所の種類^{注30}

	都 市 部	農 村 部
水洗便所（市の下水設備）	4.3	0.5
水洗便所（浄化槽）	35.3	3.4
water/seal	20.9	11.8
その他の施設	26.0	44.6
設備なし（野外／草むら）	13.5	39.7
計	100.0%	100.0%

1997 Statistical Yearbook of Bangladesh, 18th ed.

掘穴式トイレは、深い穴を掘り、屎尿や厨芥を投棄し、満杯になれば土砂で被覆し、また別の所に掘る。これは広い土地を有する農村では可能な方式で、都市ではむりである。

バケツ式トイレは、グラム型トイレともいわれる。便座の下にグムラと呼ばれる枡または桶を設置した便所である。「グラム型便所が登場した当初、回収された屎尿は市の清掃人によって木製の樽に入れられ牛車で運ばれた。そして、排水溝のそばにある近隣の小規模な投棄場（night soil depot）に捨てられ、排水溝を通じて、川に流されたか、もしくは郊外に作られた大型の屎尿廃棄壕（Trenching Ground）まで運ばれ処分されていた」^{注31}

グラム型トイレは、グムラに投下された屎尿を取り出し、運搬する清掃人が必要になる。これは最も嫌がられる労働である。三宅博之によれば、「ベンガル地方には、屎尿処理・清掃カースト集団は人口として小規模であったハリ（Hari）以外には存在しなかった」ため、「植民地インドの最大都市カルカッタ市やダカ市の場合、19世紀半ばから連合州（現在のU.P.州）やビハール州といった北インドとマドラス州（現在のタミル・ナード州）といった南インドから契約労働という形で雇い入れている」^{注32}さらに、パキスタン統治期の1940年代後半のダッカ市では、屎尿回収人の人手不足が深刻な問題となっており、当時推定人口50万人、2万2,500の回収式便所がり、屎尿回収人の数はわずか256人で、200人以上不足していたとい

注29 Siddiqui et al., Social Formation in Dhaka City, 1990年 (P.40)

注30 この統計のwater/sealが、何を意味するのか、掘穴式トイレ、バケツ式トイレが、どれに相当するのか、よく分からない。

注31 三宅博之、1999年、前掲書（116頁）

注32 三宅博之、1999年、前掲書（116頁）

う^{注33}。

このような状況は、われわれの聞き取りとびったりと重なるものである。こうした経緯を考えると、グラム型便所の屎尿処理は、伝統的な清掃人カーストが行い、他の清掃の業務、たとえばゴミの収集などはムスリムが行うなど、所属集団による職種のセグレーションがみられる可能性が極めて高い。このあたりの事情はどうなっているのだろうか。また、バンデル地区のリーダーが語っていた賃金や待遇の違いが、構造化されたものとして存在しているのだろうか。

第七の課題は、解放の戦略の問題である。バンデル地区でもコックス・バザールでも地区の指導者たちは、清掃労働の雇用の枠の拡大を市に対して強く求めていた。歴史的経緯からすれば、仕事と住居を完全に保障せよというのは、現実的な要求である。他方、ムスリムの人も安定した職として、強く求めているとすれば、競合関係に置かれることになる。もし、ハリジャンを優先的に雇用するという方針をとるなら、ムスリム側からの強い反発がでるだろう。

しかし、清掃部門のある特定部門が強く忌避されているなら、その部門だけハリジャンによって占有されるだろう。それによって経済的安定は得ても、差別は存続する。したがって、清掃労働への完全雇用を市に要求するということが、大きな矛盾をはらんでいることになる。

現在のリーダー層は、学歴獲得による他の職業領域への進出という可能性を、どの程度見通しているのだろうか。そのための条件整備という戦術的課題をどの程度現実化しているのだろうか。

第8の課題は、教育へのアスピレーションの解明である。親の世代は社会的上昇にとっての教育の価値、有効性をどのように認識しているのだろうか。コックス・バザールの長老たちは、教育に熱い期待をもっていた。バンデル地区の場合は、医者にさせたいという希望をもつ会長もいる一方で、子どもを不就学の状態にしているリーダーもいた。

医者のさせたい、教師にさせたいという親の願いは、他のスラムでもしばしば聞かれた。それが、どれだけ現実味をもつものだろうか。それを明らかにするためにも、親自身の識字・就学状況の実態の把握とともに、子どもの就学状況など教育実態の解明が必要である。

その場合、バンデル地区の夜学校をどのように評価すべきだろうか。教育対策の第一歩が、始まったという点では素晴らしい。また地区の青年が教えているという点では、子どもたちに役割モデルを提供しており、与える影響は大きいとみるべきだろう。しかし短時間の教育、不十分な設備、550タカという安すぎる手当などで、お茶を濁されているとすれば、手放しで喜べない。地区外の学校への通学が、どの程度みられるのか。それを阻んでいるものは何なのか。この問題の解明は重要である。

注33 三宅博之、1999年、前掲書（119-121頁）、なお、1人が処理できるのは1日当たり65カ所という。

バングラデシュはNGOが、教育においても、保健医療活動においても、また女性の経済的自立においても極めて重要な役割をはたしているのは周知の通りだ。けれども、sweeper colonyにおいては、素通りしているようである。NGOの活動のオルガナイザーやマネージャーがバングラデシュでのミドルクラスによって担われているが、それらの人々の潜在的意識のなかにsweeper colonyを埒外に置いてきたということはないのだろうか^{注34}。

我々は、差別と貧困を同一視すべきでない。ハリジャンの清掃労働者が厳しい差別を受けているとしても、バングラデシュの最下層に位置するとみなすことはできないだろう。住宅は、管理維持に問題があるとしても、市によって建設されたものであり、農村から都市に出てきた何十万、何百万人の人々がボスティーに住む^{注35}。これらのボスティー居住者と比べれば、遙かに恵まれている。新しく建設された住宅は、ガス、水道、電気が完備しているから、おそらく、バングラデシュのミドルクラスの住宅に匹敵するものだろう。

市の職員となって働いている清掃労働者は、高くはないが安定した賃金をもらっている。そういう点では、リキシャや土工、煉瓦割をしている下層労働者家族と比べて、経済的には安定しているだろう^{注36}。ハリジャンの清掃労働者家族の置かれている問題は、貧困問題ではない。

都市化・近代化の進展にともなってバングラデシュにおける旧来の社会階層がどのように変容し、どのように構造化されているのか。これは、差別された人々にスポットをあてることで、より鮮明に浮かび上がってくるだろう。

都市化・産業化の波は、マイノリティの中のマイノリティであるハリジャンの清掃労働者を置き去りにしていくのか、それとも彼らも巻き込んでいくのだろうか。解明すべき課題は多い^{注37}。

注34 バンデル地区は、Chowdhury教授が主宰するImageが守備範囲とする8つのWardに含まれていない。

注35 ダッカ市人口の約30%がボスティーに住むという。中には人口密度40万人/平方マイルという驚異的な過密地区がある。村山貞子、1994年、前掲書。

注36 高田峰夫が調査したチッタゴンのSコロニーの就労者の9割が、インフォーマルセクターに含まれる職種である。高田峰夫「都市貧困者たちに見られる短期的人口移動ーチッタゴンのスラムの人々(3)」(『広島修大論集』Vol.36, No.1, 1995年)

注37 2000年2月にはバンデル地区で、さらに本格的調査を来年度中に実施する予定である。